

氏名	鈴木 拓也
学位	博士（中国学）
学位記番号	博甲第98号
学位授与年月日	2013年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	李商隠詩における修辞法 一人物典故「宋玉」を中心に一
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授 門脇 廣文 (副査) 大東文化大学教授 中川 諭 (副査) 大東文化大学教授 馬場 英雄

鈴木拓也 博士論文 審査報告

鈴木拓也氏は、平成12(2000)年3月に大東文化大学文学部中国文学科を卒業後、平成13(2001)年4月に同大学大学院文学研究科中国学専攻博士課程前期課程に入学し、平成18(2006)年3月に同課程を修了した。その間、平成14(2002)年2月から平成15(2003)年8月までの一年半、大東文化大学奨学金留学生として、北京大学の対外漢語中心に普通進修生として留学した。その後、平成18(2006)年4月に後期課程に進学し、このたび学位請求論文を提出することとなった。

なお、平成16(2004)年の4月から、平成18(2006)年3月までは学部の教育補助員(TA)を、平成24(2012)年4月からは大学院の教育補助員(TA)を勤めている。

また、平成21(2009)年4月から現在にいたるまで、本学人文科学研究所の兼任研究員として共同研究に参加するほか、平成22(2010)年4月からは、日本橋学館大学の非常勤(中国語)を勤めている。

1. 論文の要旨および特色

鈴木氏の論文「李商隠詩における修辞法一人物典故「宋玉」を中心に一」の内容は、以下に示す目次の通りである。

序章 研究の動機と目的

第一章 日本における李商隠詩研究の概要と課題

はじめに

- 一 詠物詩に関する研究
- 二 詠史詩に関する研究
- 三 無題詩・借題詩に関する研究
- 四 「楽遊原」詩の解釈に関する研究
- 五 李商隠詩研究の課題

おわりに

第二章 典故の従来もつ内容はそのままだに、屈折した表現として用いる方法

はじめに

- 第一節 賈誼の才を称賛する典故について
- 第二節 宋玉の文才に関する典故について
- おわりに
- 第三章 他の詩人と異なった視点で典故を用いる方法
 - はじめに
 - 第一節 屈原に関する故事の場合
 - i 李商隠以前の使用法
 - ii 李商隠の使用法
 - 第二節 宋玉について
 - 第三節 賈誼に関する故事の場合
 - i 李商隠以前の使用法
 - ii 李商隠の使用法
 - おわりに
- 第四章 典故の従来もつ内容を改めて用いる方法
 - はじめに
 - 第一節 陶淵明の「棄官」に関する典故について
 - 第二節 宋玉の「登徒子好色賦」と「九弁」に関する典故について
 - おわりに
- 第五章 屈折した典故を複数用いる方法
 - はじめに
 - 第一節 中国人注釈者の理解
 - 第二節 先人の理解を踏まえた新たな理解
 - 第三節 各句の検討
 - i 起句「宋玉平生恨有餘」について
 - ii 承句「遠循三楚弔三閭」について
 - iii 転句「可憐留著臨江宅」について
 - iv 結句「異代應教庾信居」について
 - おわりに
- 終章 結論と今後の課題
- 【付録】 李商隠関係研究文献目録（稿）—日本編—

これより以降、評価するに値する点あるいは独自性が認められる所に焦点を当て、本論考の内容ならびにその特徴について述べていきたい。

李商隠は唐代（晩唐）の政治家で、時代を代表する詩人でもあった。官僚としては不遇だったが、詩人としては当時から高く評価されていた。その作品は修辞性に富んでいて、一読しただけでは、そこに表現された内容を十全には把握することができないだけでなく、詳細に読んででもそれを明らかに示すことが容易ではなく、解釈しきれない所が残ってしまう。そうなる主要な要因の一つに、今回、鈴木氏が検討対象とした「典故」という修辞法の特異な使用方法がある。

氏の論考の冒頭にもあるように、李商隠は「獺祭魚」と呼ばれた。「獺祭魚」とは、獺が捕らえた魚を川岸に並べることで、祭りのときに祭壇に多くの物を供えることに見立ててそのように言うのであるが、李商隠は詩文を作る際に左右に様々な文献を広げ、そこか

ら数多くの故事を引いて詩文を作ったとされ、それがまるで獺が魚を川岸に並べるようであったので「獺祭魚」と呼ばれたのである。

もちろん、李商隱が実際にそうしているところを誰かが見た訳ではない。李商隱の作品を読むと、そのようにして詩文を綴ったに違いないと思われるほどに故事を多用しているからである。問題は、それだけにとどまらない。それらはストレートに用いられているのではなく、多くの場合何らかの捻りがなされており、それで何が表現されているのかがすぐには理解し難いのである。鈴木氏が李商隱の典故使用の方法について研究しようとした動機は、そこにあった。

序章においては、氏の用いた研究方法が述べられている。李商隱詩の特徴である典故使用の検討方法には二つあり、一つは、典故を多用する李商隱詩の特徴をもたらしした要因に着目し、当時の社会情勢や詩人の生涯などからそれを導き出そうとするもので、もう一つは、李商隱詩に用いられた典故が如何に表現されているかという観点から、その表現上の特徴を導き出し、そこに込められた詩人の心情を読み取るというものである。これまでの研究は前者が中心であったが、氏は自らの研究方法として後者を用いているとしている。

第一章では、日本における李商隱詩研究を、テーマによって、一 詠物詩に関する研究、二 詠史詩に関する研究、三 無題詩・借題詩に関する研究、四「楽遊原」詩の解釈に関する研究の四つに分類して検討し、今後の課題を三点摘出している。それらを踏まえて、氏は自身の採用した検討方法について述べている。それは、まず「宋玉」⁽¹⁾とそれに関する人物の典故に絞って抜き出し、その表現の特徴を明らかにするというものである。氏による先行研究の分析結果、氏の提示した検討方法は妥当なものであると言える。

第二章から第五章までの四章は、李商隱詩の典故使用に対する具体的な分析である。

第二章では、典故が本来持っている内容をそのまま用いるものの、それを他の典故と組み合わせて用いたり、比較した相手を貶めるといった一捻りした方法を用いていることを明らかにし、この表現方法によって、賈誼⁽²⁾と宋玉に喩えた詩人自身を自ら讃えるという凝った表現の形を作り出していると結論している。

氏はまず、賈誼の文才に関する典故を取り上げ、従来はその文才が優れていた点に着目し、それに擬えられた人物の文才を褒め讃えるという方法を用いていたが、李商隱は、ある人物を讃えるために用いられた賈誼を、さらに庖丁⁽³⁾を用いて讃えるという二重の典故表現を行っていること、次に、宋玉の文才に関する典故を取り上げ、宋玉の文才をストレートに褒め讃えるのではなく、比較対象である唐勒⁽⁴⁾や景差⁽⁵⁾などを同時に詩の中に詠い、

(1) 宋玉：戦国時代末期の文学者で、屈原の弟子とされる。屈原にならって主として辞賦作品を作った。その作品として、『文選』には「風の賦」「高唐の賦」「神女の賦」「登徒子好色の賦」など、『楚辞章句』には「九弁」「招魂」などが収められている。

(2) 賈誼：前漢文帝に仕えた文臣。若くして文帝の新政に抜擢されて太中大夫となったが、保守的な元老にはばまれ、失脚して長沙に左遷された。その後再び召し返されて文帝の子の梁王の太傅となった。

(3) 庖丁：「料理人」のこと。『莊子』養生主篇に、魏の恵王の御前で、ある庖丁が見事な刀捌きで牛一頭を素早く解体して見せ、王を感銘させる記事がある。

(4) 唐勒：紀元前 290～223 年ごろに在世した。字も出身地も不明であるが、楚の人であること、宋玉や景差と同時代人であることは歴史書の記載から知りうる。『漢書』芸文志には「唐勒賦四篇」と記されているが、今日に伝わらない。

(5) 景差：紀元前 290～223 年ごろに在世した。字も出身地も不明であるが、楚の人であること、宋玉や唐勒と同時代人であることは歴史書の記載から知りうる。

彼らを非難することによって宋玉を持ちあげるという手法を採っていることを明らかにした。さらには、これらの典故表現に言えることは、ともに実は李商隠が自らを喩えたものであると指摘し、従来の典故に工夫を加えて用いているところから考えて、己の文才に対する李商隠自身の並々ならぬ自負が読み取れるとしている。氏の分析とそれによって導き出された結論には説得力がある。

第三章では、まず、屈原を取り上げる。屈原は、讒言に遭って左遷され、地方を彷徨ったあげくに失意の内に自殺した人物であるが、これを典故として用いる場合、李商隠以前の用例では左遷された後の不幸な人生を取り上げるのが通例であった。しかし、李商隠はそうではなく、屈原がなぜ左遷させられることになってしまったかという原因の方に焦点を当て、さらには、政治家としてではなく、「離騷」という優れた文学作品の作者であることを強調して詠んでいることを明らかにした。

次に、宋玉の「招魂」に関する典故については、李商隠以前の作品は屈原の魂を呼び戻そうとしたことに焦点を当てて詩に詠んでいるのに対し、李商隠はそれが失敗したことに着目していると指摘する。

さらに、賈誼に関する典故では、賈誼はいったん左遷されたものの再び中央へ呼び戻されるという幸運な人物の典型として詩に詠われることが多いが、李商隠は、朝廷に呼び戻されても実際の政治に参画させてもらえず、王の夜伽の相手をさせられただけの人物として詠んでいると指摘する。

第四章では、李商隠詩における陶淵明、潘岳そして宋玉に関する典故使用を分析して、当該典故が本来持っている内容に詩人なりの変更を加えるという特異な手法を用いていることを明らかにしている。

まず、陶淵明は官を捨てて隠棲した人物であるが、李商隠以前の詩人はその行為を好意的な典故として用いているのに対して、李商隠はそれを批判的なものに変更して用いていること、次に、「登徒子好色の賦」の宋玉の屋敷の東隣りの美女は、普通、美しい花や女性を形容するために用いられてきた。しかし、李商隠は垣根越しに見える花を擬人化し、その花が宋玉を覗いていると変えて用いていることを明らかにした。

さらに鈴木氏は、宋玉の「九弁」⁽⁶⁾の中の秋の寂しさを表す「悲愁」という典故を取り上げ、李商隠は、従来、秋の寂しさを表すために用いられた「悲愁」を「私にはそんな悲しみはない」と一旦は否定し、そして、すぐさま「それでも自然に悲しくなるのだ」と表現し、複雑な心理を表現することに成功していると評価する。

第五章では、第二章から第四章まで確認したこれらの特徴的な典故表現が複雑に組み合わされている「鄭広文の旧居を過ぎる」詩を取り上げる。この詩には二つの特徴があり、それは、第一に、「鄭広文の旧居を過ぎる」と題しているにもかかわらず「鄭広文」つまり鄭虔(685~764)のことは一言も詠んでいないことであり、第二に、その一方で全ての句が「宋玉」に関わる故事を詠んでいることである。鄭虔の旧居に立ち寄った際に作った作品と題しながら、「宋玉」のことしか詠っていない。このことをどのように理解すべきであろうか。氏はまず歴代の解釈を整理し、それをもとに一句一句に対して詳細な検討を加え、次のような四つのことを抽出した。

- ①この詩に対する従来の解釈には、第一に宋玉は李商隠自身を喩えたものである、第二に宋玉は鄭虔を喩えたものであるという二通りのものがあるが、これらは決して

(6)「九弁」:「悲しいかな、秋の気たるや」で始まる辞賦体の韻文作品。

相反するものではなく、「宋玉」を媒介とすれば、「李商隱＝宋玉＝鄭虔」という関係が成り立ち、さらには「李商隱＝鄭虔」という関係になること。

②承句では、本来は賈誼の故事に基づく典故となるべきものを宋玉のものとして用いているが、それは宋玉を介して李商隱自身を鄭虔と結びつけるため、そうすることで、文才が豊かであるが故に官吏としては不遇だったという内容を「宋玉」という言葉に附与していること。

③転句では「可憐（憐れむべし）」という感慨を直接述べる言葉によって、話者が詩の表面に現れ、直接的には宋玉およびそれによって喩えられた鄭虔を憐れんでいるのであるが、「鄭虔＝宋玉＝李商隱」というこの詩全体の構成を考慮に入れれば、鄭虔を憐れむことを通して、宋玉を、そして李商隱が自らを自虐的に慰めるという構造になっていること。

④この詩で詠まれた庾信⁽⁷⁾と宋玉の共通点は、この詩に関係する全ての人物の共通点で、それは、文才があるが故に官吏としては不遇であったという点であること。

そして、氏は、これら四点の特徴があることにより「鄭広文の旧居を過ぎる」詩は、複雑で味わい深い作品となっているとし、最後に「私が鄭虔を弔ったように、後の世には私を弔う者もきっと現れるであろう。そしていま私の住処となっているこの地は、後の世になればきっとまた文才を持つが故に冷遇されることとなった者の住処となるだろう」という斬新な解釈を示している。

2. 論文審査の内容および評価

次に、本論考に対する評価について述べたい。まず、評価すべき点であるが、それは次の六つにまとめることができる。

一、当該分野の研究史における位置づけが明瞭であり、当該分野の研究の発展に貢献できている

鈴木氏は、第一章「日本における李商隱詩研究の概要と課題」において、日本の李商隱研究史の全体を概括し、その中で自らの研究の位置を明確に述べているとともに、このたびの氏の研究は、李商隱詩の特徴とされてきた典故使用の方法を解明しており、これまで李商隱詩研究の発展に十分に貢献できている。

二、研究対象、研究目的が明瞭であることについて

氏は、序章「研究の動機と目的」において、自らの研究対象が李商隱詩における「典故」という修辞法であること、研究目的はその特徴の解明であることを明瞭に述べており、第二章から第五章までの四章のすべての章において、一貫してそのことを踏まえて論を展開している。

三、研究内容、研究方法に独創性があることについて

氏の研究対象は、李商隱詩の典故という修辞法についてであるが、このことについて本格的に研究した論考は国内だけでなく国外においても認められない。また、研究方法は、李商隱の生涯の事跡から典故の意味するところを導き出すのではなく、それが如何に表現されているかという観点から表現上の特徴を明らかにし、そこに表現された李商隱の心情

(7) 庾信：南北朝時代の文学者。南朝の梁に生まれ、前半生は皇太子蕭綱（後の簡文帝）のサロンの文人として活躍したが、侯景の乱後の後半生は北朝の北周に身を置くこととなり、「哀江南賦」をはじめとする、故郷江南を追慕する哀切な内容の作品を残した。

を読み取ろうとするもので、これも従来の論考には認められない。

四、論旨が明瞭で、論旨に一貫性があり、体系的に構成されていることについて

本論考は、序章で今回の研究の動機と目的について述べ、第一章では李商隠詩研究の概要と課題を明らかにし、第二章から第四章の三章では、それぞれ李商隠詩における典故法の三つの特徴を摘出し、第五章では、それらが複合している難解な作品「鄭広文の旧居を過ぎる」詩をとりあげ、複雑に組み合わされた典故使用の構造を分析し、そこに表現された李商隠の心情を読み解いている。終章「結論と今後の課題」では、本論考の結論と今後の課題について述べている。本論考の構成はこのように研究目的が明瞭で、論旨に一貫性があり、体系的に構成されている。

五、斬新な解釈を提示したこと

本論考の第五章は、「鄭広文の旧居を過ぎる」詩について論じたものであるが、これまでの解釈はいずれも不十分で、この詩に表現された内容を十分に解明したものではなかった。しかし、氏は、典故使用の方法という観点からこの詩を分析し、そこに込められた李商隠の心情を読み取り、斬新な解釈を提示した。今後、この詩について論じる際には、鈴木氏の解釈を踏まえなければならないであろう。

六、真摯な態度で、緻密な読みと着実な検討を重ねたものであることについて

鈴木氏は、大学院進学以来、真摯な態度で原文を正確に読解する訓練、そして文学的表現の内容を正確に解釈する訓練を粘り強く重ねてきたが、その結果、今回の論考においても原文読解の誤りはほとんど認められないだけでなく、そのような読解を基にして、一つ一つの研究課題に対して着実な検討を行って妥当な解釈を示し、斬新な結論を導き出している。今回の論考は、氏が高度な専門業務に従事するために必要な知識や能力を十分に備えていることを示している。

氏の論考には、これといった大きな欠点は認められないが、今後なされるべき課題が無いわけではない。

一、人物典故以外の典故使用の方法の特徴の検討

今回の論考は、人物に関する典故表現に限定したものであるが、典故表現にはその他にもいろいろある。たしかに、李商隠詩における典故使用の特徴の最も重要なものは人物に関するものであるが、その他の典故についても検討を加えれば、難解な李商隠詩の解明をさらに進めることになるはずである。

二、同時代の詩人の典故使用の方法との比較検討

本論考では、前代の作品における典故使用の方法との比較検討はなされているが、同時代の作者、たとえば温庭筠や杜牧などの典故使用の方法との比較は必ずしも十分ではない。したがって、これらの詩人の作品との比較は李商隠詩の典故使用の特徴をより明確にするためにも不可欠である。

三、李商隠詩におけるその他の修辞法の特徴の検討

今回の論考は、典故という修辞法に限定して検討したものであるが、修辞法には、その他にも、たとえば鈴木氏も論考の中で言及しているように、比喩法、擬人法、倒置法、反語法、対句法などさまざまなものがある。李商隠詩全体を正確に解釈するには、それらの修辞法の特徴を解明することが不可欠である。

以上のように今後に残された課題があるとはいえ、それらは本論考で検討されたことを踏まえた上で為されるべきものであり、また今回の論考で示された鈴木氏の研究態度をもって着実に行えば、必ずや果たされるものと思われる。鈴木氏には、さらに研究を継続し、

より大きな成果をもたらすことを期待したい。

3. 結 論

以上の評価に基づき、本審査委員会は全員一致を以て、鈴木拓也氏は博士（中国学）の学位を授与される資格が有るものと判断し、ここに報告する次第である。